
犬とコナンと服部と

千景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬とコナンと服部と

【ISBN】

N8769D

【作者名】

千景

【あらすじ】

事件の無い日のコナンの一日の話。ある日、毛利探偵事務所に訪れた服部平次。そこには、コナンと一緒に犬がいて・・・

「うつわあ、かわいい」

毛利探偵事務所のドアが開き、耳に飛び込んできた第一声がこれだった。突然の訪問者に、新一は視線をやる。

「いきなり来て、言うことはそれだけか？ 服部

「はは、元気にしどつたか？ 工藤。しかし、相変わらずしけた事務所やなあ」

「何しに来たんだよ」

新一は迷惑そうに言い、読みかけの本をテーブルの上に置く。
「なんや、その嫌そうな顔は。こっちに用があつたから、ついでに様子を見に来てやつたのに。・・・な、それにしてもその犬どうしたん？ でつかい、犬やな」

平次は新一の隣に座っている白い大型犬を顎でさす。犬は平次の姿を見て、人懐っこく、尾を振つていた。

「ああ、蘭が預かってきたんだよ。飼い主が今日引き取りに来るつて言つてんだけど、まだ来ねえんだよ」

「それで、留守番かいな。あの二人はドコいつてん

「おっちゃんは仕事で、蘭は空手の試合だと。つたく、俺に犬を押しつけていきやがつて・・・俺にも予定があつたんだぞ」

次第に声が不機嫌になつてゆく新一の様子に、平次は聞き返す。

「予定？」

「そうだよつ、久しぶりにサッカーの試合を見に行くはずだったのによお、飼い主は来ねえし・・・」

「なんや、それで不機嫌だつたんかいな、サッカーなんていつでも見れるやんか」

「せつかくチケット手に入れたのに・・・」

「この犬ええ顔しとるなあ。ごつつう、かわいいやん」

新一の愚痴を無視し、犬の頭を撫でる。意外にも犬好きのようだ。

それを見て、新一は席を立つ。平次に愚痴をこぼしても仕方がないと思つたのだろう。

「なあ、ここの犬なんて名前？」

「バロン」

犬缶を手に、新一は席に戻る。そろそろ飯時なのだ。

「しつかし、大きいなあ。工藤お前やつたら、乗れるんぢやうか」「えつ、ばかつ、やめろ」

ふいに訪れた浮遊感。気付いたら、抱え上げられていた。子供の姿である新一は、抵抗も虚しく平次の腕の中だ。あけかけの犬缶の中身が飛び散り、体に降りかかった。

「ほら、余裕で乗れる。ははは、こいつ似合つとるわ。かわいいなあ」

「服部い、その台詞、まさか、俺込みで言つてんぢやねえだらうな」犬の背に乗せられた新一は、平次を睨みつけた。大体、高校生である男に「かわいいくななど」という台詞をはくなんて、もつてのほかだ。

新一は勘違ひしたが、平次はもちろん犬に言つた台詞だったのだが・・・。

新一が本気で嫌がつてゐるのを見て、平次は面白半分に新一をからかう。

「ええやん。今は小学生なんやし、ああ、コナン君、かつわいい」

「バロン、行け」

「え、ちょ、ちよう待ちいや」

平次に飛びかかれという合図だつた。それを悟つた平次は後退る。

こんなに大きな犬に飛びかかりでもされたら、洒落にならない。

「悪かつた。工藤。そんな怒りなや、たんなる冗談やんか」

「知らねえなあ。・・・バロン、やつてしまえ！」

その声にバロンが起こした行動は、新一の思惑とは反するものだつた。

「わああつ、ばか、やめろ」

「工藤……？」

何をどう解釈してそうなったのか、バロンは背中に乗る新一に向かって飛びかかった。新一の体には先程飛び散らせたドッグフード（生タイプ）がついている。バロンは尻尾を激しく振り、実際に楽しに新一の顔をナメていた。これでは、じやれているのか、ドッグフードが目当てなのかよくわからない。

「くすぐつたいつ、やめろつてば！」

「……なんだかなあ」

平次は新一と犬がじやれているのを見て拍子抜けした。これではちょっととびびつた自分が馬鹿みたいだ。

（しかし、他の奴らが見たら、まるつきり犬に襲いかかられている子供の姿やううなあ）

「ははっはは、本当にくすぐつてえ。やめろつたらつ」

バロンには新一の言うことを少しも聞く気がないらしい。新一は我慢できずに笑い転げている。実に微笑ましい姿だ。

（はは・・・誰もこいつの中身が高校生やなんて言つても信用せんやうひなあ。ホンマ、じつう可愛いんですけど・・・つて、何言うてんねん俺！）

最後の方は無意識に思つた事だつた。頭に血が上り、顔が赤くなる。平次はハツと我に返り、一人で自分の台詞にツッコミを入れた。（いかん、あいつの外見に、騙されたらあかん！相手は高校生やぞ、しかも男相手に何考えてんねん！今のはナシや、今のはナシッ）

頭を激しく振り、浮かんだ言葉を吹き飛ばそうとする。

「服部い！み、見てないで、助け・・・る、ははっ」

「お、おおっ」

新一が、苦しそうなに喘いでいるのを見て、平次は慌ててバロンを取り押さえようとするが、バロンはそれを遊んでくれるもだと思いい、今度は平次に飛びかかった。

大型犬の力は半端じやない。ちょっとじやれられるだけでも一苦労だ。また、バロンはそちらの大型犬よりも一回り大きかつた。種

類分からぬが一本足で立たれると、平次の身長と同じぐらいになる。

「こ、アホ犬つ、人間様をなんだと思つてんだ！いい加減、大人しくせえ！」

「バロン！」

しばらく息も絶え絶えになつていた新一は、ようやく起き上がり、平次に加勢する。バロンは意外にすばしつこく、いつこうに大人しくする様子もない。一人の呼びかけも、いつしか懇願のそれへと変わつていた。暴れたせいで、ドッグフードや色々なモノが散乱し、見るも無惨だ。

「何をしてるのあなた達！」

その時だつた。部屋中に一喝が飛ぶ。その声に驚き、あれほど言うことを聞かなかつたバロンの動きがピタツと止まる。二人ももちろん例外ではない。

ドアの前にはいつのまにか蘭の姿があつた。その顔が真つ赤になつてゐる。そうとう怒つてゐるようだ。部屋の状態を見れば無理もない。新一は蘭の様子に一気に血の気が引く。

「蘭姉ちゃん・・・」

「おお、帰つて來たか。邪魔してゐるで。」

「ちょっと・・・練習試合から疲れて帰つてみれば・・・なんのよこのありさまは」

「帰つて來てくれて助かつたわ。ちょお、聞いてくれるか、このあほ犬があ・・・」

「は、服部つ」

何の悪びれもなく蘭に話しかけようとした平次に、新一は慌てた。蘭の幼なじみである新一には、今どれだけ蘭の機嫌が悪いのかよくわかつっていた。声を張り上げるのでもなく、逆にトーンを落として喋る。こういう時に話しかけるのは相当マズい。そつとしておくのが一番なのだ。

「部屋、片付けといつてよね、一人とも

「は、はーい、蘭姉ちゃん」

「なんや、俺も？俺は密やで？」

「ばかっ」

事務所を出ようとしていた蘭の足がピタリと止まる。新一にはその動きが恐ろしかった。

「何か・・・言つた？服部君・・・」
ゆづくと振り向く蘭の額に青筋が見える。顔は笑つてゐるが、拳をバキバキと鳴らしていた。

「な、何でもありません。ほな、片付けよかーーぼづ」

有無も言わせぬ蘭の様子に、平次はよつやく話る。（こわい・・・）

「そう？気のせいだつたかしら。バロン・・・邪魔しちゃダメよ」
バロンは床の上に寝転がり、腹を上に向けてクンクンと鳴いている。犬は正直だった。

事務所の扉が閉じ、新一と平次はほつと肩を撫で下ろす。

「いっわあ。ありや、半端やないだ」

「はははは

新一には笑うしかなかつた。

「しかし、これ、二人で片付けるんか」

部屋を見渡すと、よくこれだけ散らばつたものだと想つ。見てるだけで気が重くなつてきた。

結局全てを片付けるのに三時間を見た。ただ、顔を見に寄つただけなのに、何故こんな事になつてしまつたのか。

思わぬ重労働に、新一はすっかりバテてしまい、ソファーの上で、寝息をたてている。

（やっぱ、体が小さいと体力も違うもんか）

平次はこつそり、新一の顔を覗き込み、そう思つた。

中身が高校生でも寝ると小学生。ちょっと可愛いかもと、よぎつた言葉を頭のスミに追いやつ、でも、意外に楽しかつたかな。

と思い直す。

(そやな、掃除はしづかっただけだ。藤といふと、飽きへんかったな)

また暇な時来よう。平次はそう思い、事務所を後にするのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8769d/>

犬とコナンと服部と

2010年10月8日15時56分発行